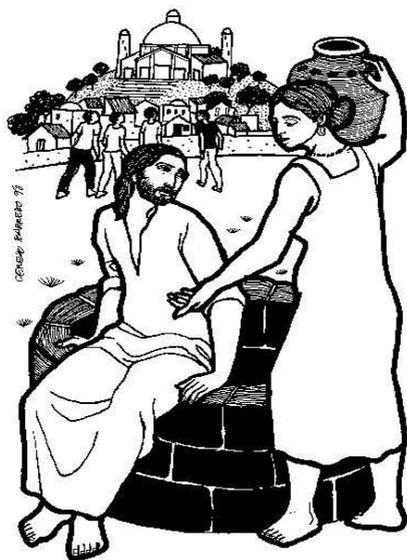


大齋節第 3 主日

聖書日課と主教のメッセージ



日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

2020.3.15 大齋節第 3主日

特 禱 大齋節第 3主日特禱

旧約聖書 出エジプト記 17:1-7

日課詩篇 第 95 篇 6-11

使 徒 書 ローマの信徒への手紙 5:1-11

福 音 書 ヨハネ福音書 4:5-26, 39-42

大齋節第 3主日特禱

全能の神よ、どうかあなたを呼び求める僕らの願いをみ心に留め、力あるみ手を差し伸べてすべての敵を防いでください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

旧約聖書 出エジプト記 17:1-7

主の命令により、イスラエルの人々の共同体全体は、シンの荒れ野を出発し、旅程に従って進み、レフィディムに宿営したが、そこには民の飲み水がなかった。民がモーセと争い、「我々に飲み水を与えよ」と言うのと、モーセは言った。「なぜ、わたしと争うのか。なぜ、主を試すのか。」しかし、民は喉が渴いてしかたないので、モーセに向かって不平を述べた。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。わたしも子供たちも、家畜までも渴きで殺すためなのか。」モーセは主に、「わたしはこの民をどうすればよいのですか。彼らは今にも、わたしを石で打ち殺そうとしています」と叫ぶと、主はモーセに言われた。「イスラエルの長老数名を伴い、民の前を進め。また、ナイル川を打った杖を持って行くがよい。見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたはそ

の岩を打て。そこから水が出て、民は飲むことができる。」モーセは、イスラエルの長老たちの目の前でそのとおりにした。彼は、その場所をマサ(試し)とメリバ(争い)と名付けた。イスラエルの人々が、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と言って、モーセと争い、主を試したからである。

日課詩篇 第 95 篇

- 6 身を低くして伏し拝み // 造り主、主のみ前にひざまずこう
- 7 主はわたしたちの神、わたしたちは神の民 // わたしたちはその牧場の民、そのみ手の羊
- 8 今日、神の声を聞くなら、メリバのあのときのように // マッサの荒れ野の日のように、心をかたくなにしてはならない
- 9 あのとき、あなたがたの先祖たちは // わたしの業を見たが、わたしを試しこころみた
- 10 四十年の間わたしを悩ませた民に言った // 「彼らは心の迷った民、わたしの道を知らない」
- 11 わたしは怒って誓った // 「彼らをわたしの安息に入らせない」

使徒書 ローマの信徒への手紙 5:1-11

このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わ

わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

福音書 ヨハネによる福音書 4:5-26, 39-42

それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、そ

の人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせて

くださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

大齋節第三主日の黙想

主教 フランシスコ・ザビエル 高橋宏幸

今日の福音書は靈的にも大変美しく、イエス様とある女性との間で織りなされた対話を軸に描かれています。

ところが、この女性はサマリア人ということもあり、これまで低くみられてきたと想像できる上、「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」というイエス様の言葉が伝えているような女性です。加えて、福音記者は事件が起こったのは「正午ごろのことである」という一言を加えています。

イエス様は暑い最中、井戸の辺で休んでおられ、弟子たちは食べ物

を調達に出掛けている不在時に、この女性が水を汲みにやって来きました。通常、生活に不可欠な水を汲みに来るのは、余程の事が無い限りは朝に行う仕事でした。しかも、この地方では灼熱のような状態になる昼の時間帯に水を汲みに来て、帰りは重い水を担いで帰るという事を普通はしないようでした。想像してみますと、人と顔を合わせなくて済む時間帯に敢えて水を汲みにやって来なければならない程に、人目を憚らなければならない生活をしていたと想像できます。

事の発端は、イエス様の方から「水を飲ませて欲しい」と頼まれたことでしたが、女性は「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むですか」と一端は断ります。ユダヤとサマリアは取り分け信仰上の問題で決裂して久しくなり、今や乗り越えられない程の溝が出来ています。殊に、ユダヤ人からサマリア人への侮蔑、差別には深いものがあるだけに、サマリア人の女性に躊躇いも無く「水を飲ませてください」と言われたイエス様に対して、女性の方が驚いたようです。

加えてイエス様はくむ物を持っておられず、おそらく女性から借り、命に直結する力を持つ水を飲まれたことでしょう。イエス様は、その女性とくむ物を共にされることを何の妨げともしておられないようです。それはこの女性の「渇き」を癒されることにご自身の心を添わせようとされたからでしょう。そして、どうにも満たされない「渇き」の中に女性の悲しみを見て取り、そこへ真の癒しを注ぎ込もうとされたことでしょう。

やがて、女性は礼拝の話、即ち神様の方に心向け始めます。サマリア人は最早エルサレムで礼拝をしなくなって久しくなりますが、イエス様は「エルサレムとサマリアの何れが本家本元かでは無く、霊と真理とをもって礼拝を捧げる時がくる」「神様は、サマリア人の渇きもユダヤ人

の渇きも潤し、癒して下さる神様なのだ」と言われます。

女性も応えます。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」と。サマリア人の渇きもユダヤ人の渇きも潤し、癒して下さる神様に礼拝を捧げる時を待っていた彼女は、真に求めていた方、渇きを潤し満たして下さる方に出会い、神様の愛と憐れみ、赦しで満たしていただくことになりました。